

高齢者の定義をめぐって

卒業生（2015年）藤原瑠美

授業が終わると、10名ぐらいの院生や聴講者が石田昌宏先生を囲んでいました。こんなフレンドリーな光景は、これまでであるようではなかったかなと思いました。

私は「石田先生の高齢者論は、日本人的であると思います」などと、失礼な発言をした自分を恥じながら、最後に先生を囲む輪に加わりました。

石田先生はご講演のまとめに、人生100年の時代に入り、「65歳以上の人を一律に高齢者と歳で一括しなくてもいいのではないか」「80歳過ぎても元気なら働いてもいい。65歳という年齢で一律にリタイアしなくてもいいのではないか」「高齢者として社会保障でケアされるのは、虚弱になった時に（個別に）対応する」。頭を切り替えてみんなで考えていこうとおっしゃいました。

先生のお言葉を聞きながら、素敵で元気なスウェーデンの高齢者は65歳で一律にリタイアしている。年金生活者として充実して暮らしていることを思い出しました。私は2005年から7年余り、通算で260日、長期ではありませんが、日本とスウェーデンを7回行き来しながら、スウェーデンの一つのコミュン（市）を定点観測して本を2冊書きました。

現在のスウェーデンの高齢者の暮らしぶりは、歳月をかけて民主主義の中立国家が生みだしたたまものです。欧州の最貧国だった同国は、第2次世界大戦に参戦しなかったために、いち早く高度経済成長を果たしました。社会民主党の4人の優れた政治家が19世紀末から強靱なリーダーシップを発揮してバトンタッチ、税制改革の上で地方自治を耕してきました。

その結果、スウェーデンの高齢者は健康で充実した暮らしをしています。例えば、在宅で福祉サービスを受けている認知症の高齢者で重度者（要介護3以上）は9%しかいません。訪問介護や看護に同伴すると認知症でも45%が一人暮らしです。

健康なお年寄り誕生は、1992年のエーデル改革（医療福祉改革）のたまものです。エーデル改革は研究成果のたまものです。それが法に変わり70年代後半の社会福祉制度の流れを変えました。

この根底には科学的な研究の地道な累積があります。アイデアや発案ではありません。

なので、先生のご改革が頭が柔軟な研究者を巻き込んで結実されることを願います。

